生爪を剥ぐ

葉山嘉樹

青空文庫

夏の夜の、払暁に間もない三時頃であった。星は空一杯で輝いていた。寝苦しい、麹室のようなムンムンする、プロレタリアの群居街でも、すっかりシーンと眠っていた。

その時刻には、誰だって眠っていなければならない筈であった。若し、そんな時分に眠っていない者があるなら、それは決して健康な者ではない。又、健康なものでも、健康を失うに違いない。

だが、その（時刻）は眠る時刻であったが、（時代）は健康を失っていた。

プロレタリアの群居街からは、ユラユラとプロレタリアの蒸焼きの煙のような、見えないほてりが、トタン屋根の上に漂うていた。

そのプロレタリア街の、製材所の切屑見たいなバラックの一固まりの向うに、運河があった。その運河の汚ない濁った溜水にその向うの大きな工場の灯が、美しく映っていた。

工場では、モーターや、ベルトや、コムベーヤーや、歯車や、旋盤や、等々が、近代的な合奏をしていた。労働者が、緊張した態度で部署に縛りつけられていた。

吉田はその工場に対してのある策戦で、蒸暑い夜を転々として考え悩んでいた。

蚊帳の中には四つになる彼の長男が、腐った飯粒見たいに体中から汗を出して、時計の針のようにグルグル廻って、眠っていた。かますの乾物のように、痩せて固まった彼の母は、寝苦

しいものと見えて、時々溜息をついていた。
（一体どうするのが、俺には一番いいのだろう）
彼は、暑さにジタバタする子供の寝顔を、薄暗い陰気な電燈の光に眺めた。
（一番いいのは、俺が首を吊ってしまうことだ！）（だが此年寄のおふくろは？　三人目の子供を産むために、下の児を連れて県病院の施療病室にいる女房は？　此二人の可愛いい男の子と、それから今度生れる赤ん坊とは？　それはどうなるんだ？　どうして生きて行くんだ？　オイ！）
吉田は大きな溜息をついた。両方の手で拳を固く拵えて、彼の部厚な胸を殴った。
（だが、何とも為方はないさ。俺がよしんば死なないにした処で、――今度の事――で監獄に打ち込まれるとしたらどうだ！　死んだのと同じことになるじゃないか。いっそのこと……）
「おまい、寝られないのかい？　又早く出かけなけゃならないのにねえ」
おふくろは弱い声で云った。「お母さんも眠れないんですか。わしは今までグッスリ眠ったんですよ。腹の具合は少しはいいですか？」
（腹の具合が良かろう筈がねえじゃないか、医者にもかけねえ、薬も飲ませねえ、軟かい滋養分も食べさせない、その代りに子供の守をさせてる！　地獄だ！　自分で看護婦が入用な、垂れ流しの老人に、子供の守をさせる。死ぬまで車を引っ張る馬のように、死ぬまで苦労を背負わせるんだ。子供が七輪の炭火の上に倒れても、よう起さないで泣き出してしまう老人に、

――畜生！　俺は一体どうなればいいんだ。ああ、――明日も早いから――とおふくろは云ってる。明日俺の出かけるのは、工場の前のピケッチングじゃないか！　ふうっ！）

彼は、音のしないように髪の毛をひっ掴んだ。そして憎ったらしく、検束者をでもするように、やけに引っ張った。髪の毛は汗でねばねばしていて、ふて腐れたように手にザワザワ捲きついて来た。

――吉田さん、吉田さん。――

暑苦しいために明けっ放した表から、誰かが呼んだ。

吉田はハッとした。

（来やがった。遂々来やがった。何時だ、三時だな、畜生！　寝込みを踏み込みやがったな）

彼は、本能的に息を詰めた。そして耳を兎のようにおっ立てた。

「どなた？」

おふくろが、喘ぐように云ったのと、吉田が、「しっ」と押し殺すような声で云ったのと同時であった。

（為様がない、おしまいだ。これで片がつくんだ。奴等が一段ずつ位と月給が上って、俺たちや立ち腐れになるんだ）

「誰だい？」

彼は、大きな声で呶鳴った。

「中村だがね、ちょっと署まで来て貰いたいんだ」

——誰だい——と呼ぶ吉田の声が、鋭く耳を衝いたので、子供が薄い紙のような眠りを破られた。

「父ちゃあん！」

子供の食い取ってしまいたいような、乳色の手が吉田の頸にしがみついた。

「おお、いい子、いい子、泣くんじゃねえ。誰が来たって、どいつが来たって、坊を渡すこっちゃねえからな」

彼は、子供を確り抱きしめた。そしてとりたての林檎のように張り切った小さな頬に、ハムマーのようにキッスを立て続けにぶっつけた。

M署の高等係中村は、もう、蚊帳の外に腰を下して、扇子をバタバタ初めていた。

「今時分、何の用事だい？　泥棒じゃあるめえし、夜中に踏み込まなくたって、逃げも隠れもしやしねえよ」

（此儘行ったんじゃ困る。家中に二十銭しかない。二十銭では何ともならない。何とか都合しといてからでないといけない。おふくろも子も乾上っちまう。さて）

吉田は、そう考えることによって、何かのいい方法を——今までにもう幾度か最後の手段に出た方がいい、と考えたにも拘らず、改めて又、——いい方法を、と、それが汗の中にでもあるように汗みどろになって、全速力で考え初めた。だが、汗は出たが、いい考えが浮く筈がな

かった。

「明日でもいいでしょう、と云ったんだが、どうしても直ぐにって署長の命令だからね、済まないが、直ぐに来て貰いたいんだ。直ぐに帰すからね」

中村は、こう云うと、又煽ぎ立てた。

（へ、すぐに帰す！　極り文句を云ってやがらあ）

「何しろ夜中じゃしようがないよ。子供を手離せないもんだからな。嬶が病院に行ってるから、一人は俺が見てやらなけゃ、ならないんだよ。まあ、朝まで待って呉れよ」

子供は、吉田と中村との話を、鋭く聞いていた。そして、自分が生れると直ぐの年から、母親の背に縛りつけられて、毎年、警察や、裁判所や、監獄の門を潜ったことを思い出した。

「父ちゃん、いやだよ。行っちゃいやだよう」

泣き声と一緒に、訴えるような声で叫んで、その小さな手は、吉田の頸に喰い込むように力強くからまった。

人生の、あらゆる不幸、あらゆる悲惨に対して殆んど免疫になってはいた吉田であった。不幸や悲惨の前に無力に首をうなだれる吉田ではなかった。どんな困難な境遇に立っても客観的な立場を守って、的確な判断と作戦とを誤らなかった彼ではあった。彼の心の中にどっしりと腰を下して、彼に明確な針路を示したものは、社会主義の理論と、信念とであった。

（俺だけじゃないんだ！　三千の兄弟たちが、あの光り輝く工場の中の部署についている三千

の兄弟たち、あの工場以外のどの工場にも、労働者街にも溢れている、全プロレタリアの均しく背負っている苦痛なんだ。全てのプロレタリアが此苦痛に負けた時、どうなるんだ！　勝て！　俺一人位はいいだろう、と云う怯懦の中から、全プロレタリアの陣営が総崩れになるんだ。起て！　此子供のためにも！　俺が子供に贈物にする事の出来そうな唯一の望みは、プロレタリア解放運動の上にかかっているんだ！）

「ああ、行きゃしないよ。坊やと一緒に行くんだからね。些も心配する事なんかないよ。ね、だから寝ん寝するの、いい子だからね」

「吉田君、早く来て呉れないと困るね　待っ……」

中村は口を噤んだ。

「ハハハハハ。誰かが待ってるのかい。いいよ。待ってる方は痺れを切らしても、逃げると云う事はないからね。今行くよ」

「お前、又長くなるのじゃあるまいね」

病み疲れた、老い衰えた母は、そう訊ねることさえ気兼ねしていたのだが、辛抱し切れなくなって、囁くように言った。

「大丈夫ですよ。お母さん、直ぐ帰って来ますよ、坊やを連れて行って来まさ」

（大丈夫ですよ、向うの気の済むまで居て来ますよ。気休めに坊やだけ、向うまで連れて行ってやりますけれどね）と云う方が真実であった。

勿論、直ぐ帰れる筈のない事は、吉田には分り切っていた。劃時代的な二つの階級間の闘争が、全市から全日本の相互の階級を総動員して相対峙していたのだ。それは国際階級戦の一つの見本であった。

「連れて行ってくれる！　ね、父ちゃん。坊やを連れて行って呉れるの。公園に行こうね。お猿さんを見に行こうね。ね、そしてお芋をやろうね」

「ああ、いいとも、公園に行くんだ。そして公園でおとなしくお猿さんと遊ぼうね」

「公園に行こうね、おしゃるしゃんとあそぼうね」

子供は、吉田の首に噛りついたまま、おしゃるしゃんと遊ぶことを夢に見ながら、再び眠った。

（六時まで待とう。六時までにはきっと何かの情報があるだろう。依田が来るだろう。そうすれば、依田に顛末を知らす事が出来る、その上で行こう、六時にはピケッチングの交替になる時間なんだから、どうしてもそれまでは待たなければならない）

中村は「困るなあ、困るなあ」と呟きながら、品物でも値切るように、クドクドと吉田を口説いた。

吉田の老い衰えた母は、蝸牛（かたつむり）のように固くなって、耳に指で栓をして、息を殺していた。

ひどい急坂を上る機関車のような、重苦しい骨の折れる時間が経った。

毎朝、五時か五時半には必ず寄る事になっている依田は、六時になるに未だ来なかった。

――依田君。六時まで、三時から君を待ったが、来ないから、僕はM署へ持って行かれることにする。いずれは君にもお鉢が廻るんだろうが、兎に角警戒を要する。皆やられたんじゃ仕方がないからな。それから、こんな事は云えた義理ではないんだが、僕の留守の者たちの事も気にかかる。若し、出来ればおふくろや子供の面倒を見てやって貰いたい。自重健闘を祈る。

――

吉田は、紙切れに鉛筆で走り書きをして、母に渡した。

「これを依田君に渡して下さい。私はちょっと行って来ますから。心配しないで下さいね。大丈夫だから」

老母の眼からは、涙が落ちた。

吉田は胸が痛かった。おそろしい悲しみと、歯噛みしたいような憤怒とが、一度に彼の腹の底からこみ上げて来た。

が、吉田はすべての感情を押し堪えて、子供を背中に兵児帯で固く縛りつけて、高等係中村と家を出た。

子供は、早朝の爽やかな空気の中で、殊に父に負ぶさっていると云う意識の下に、片言で歌を唄いながら、手足をピョンピョンさせた。

――一九二六、一一、二六――

青空文庫情報

底本：「日本プロレタリア文学全集・8　葉山嘉樹集」新日本出版社
　　1984（昭和59）年8月25日初版
　　1989（平成元）年3月25日第5刷
初出：「不同調」
　　1927（昭和2）年1月号
※底本の親本（初出）の伏せ字は、底本では編集部によって復元され、当該の箇所には×が傍記されています。
入力：林　幸雄
校正：伊藤時也
2010年1月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

生爪を剥ぐ

葉山嘉樹

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/